

はじめに

ニコディム・パーヴロヴィッチ・コンダコフ(1844-1925年、図1)は、『ビザンティン美術史—ギリシャ語彩飾写本を中心に』(1877年、オデッサ刊、図2)、『聖母の図像学』(1914-15年、ペトログラード刊)などの著書によって、ビザンティン以外の西洋中世の研究者のあいだでも広く知られているのみならず、その調査・研究領域も、コンスタンティノープルやシナイ山、マケドニア、シリア・パレスティナ、グルジアなどの広範なフィールドの現地踏査はもちろんのこと、彩飾写本やイコン、さらにはエマール工芸などにも広く目を向けており、まさにビザンティン美術史の基礎を築いた美術史家と言っても過言でない¹。

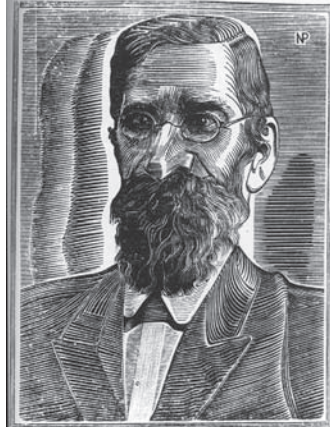


図1 ニコライ・パヴロヴィッチ《ニコディム・コンダコフ》1925年 木版画

本稿では、とりわけこのコンダコフの最晩年、プラハ時代に焦点を当てる。第1次世界大戦が終了し、ハプスブルク家の支配から脱して新生のチェコスロヴァキア共和国ができるのは1918年のことである。当時のチェコスロヴァキアは、パン・スラヴ主義のいわば一大中心地であり、パリを中心に活動していた画家でグラフィック・デザイナーのアルフォンス・ミュシャもプラハに戻り、モスクワやアトス山にも取材した大規模な「スラヴ叙事詩」連作を制作している。コンダコフが最終的な亡命先としてこの新生国家であるチェコスロヴァキアを選んだ背景には、亡命ロシア人知識人サークルのネットワークもあったであろうが、それと共に、当時のチェコスロヴァキアがコンダコフの

ようなスラヴの文化や歴史に精通した知識人を積極的に受け入れようとしていたこともあったのではなかろうか。本稿では、こうした当時のチェコスロヴァキアでの思想的背景も踏まえ、晩年のコンダコフやその研究仲間たちの仕事について考えていく。



図2 ニコディム・コンダコフ『ビザンティン美術史』(仏語訳) 1886年 個人蔵

ロシアでのコンダコフの研究活動と業績

ニコディム・コンダコフは、クルスク州ハラニにて、トゥルベツキー公領の執事の息子として生まれるが、幼少時にモスクワに移り、初中等教育もモスクワで受けることになる。そして1861年にはモスクワ大学歴史哲学部に入学し、フョードル・ブスラーエフのもとで、古代ロシアの伝統技芸や伝承文学、造形芸術などの文化全般について広く学ぶことになり、やがては文化全般から独立した美術史学の枠組みを構想するようになる²。モスクワ大学を卒業した翌年の1866年には、モスクワのギムナジウムや士官学校にて国語や歴史を教えるようになり、また同年、モスクワ古美術協会の機関紙に初

1
コンダコフについて総体的に扱った文献としては次を参照。W. Eugene Kleinbauer, "Nikodim Pavlovich Kondakov: The First Byzantine Art Historian in Russia", in: D. Mouriki et al. (ed.), *Byzantine East, Latin West. Art-historical Studies in honor of Kurt Weitzmann*, Princeton: Princeton University Press, 1995, pp.637-643; И.Л.Кызласова(ed.), *Мир Кондакова: Публикации. Статьи. Каталог выставки*, Москва:Русский путь, 2004.

2
ブスラーエフについては次を参照。Г.И. Вздорнов, *История открытия и изучения русской средневековой живописи. XIX век*, Москва: Искусство, 1986, pp.79-125.

3

Л.Л. Копецкая, "Н.П.Кондаков и чешская среда", in: И.Л.Кызласова(ed), *Мир Кондакова: Публикации. Статьи. Каталог выставки*, Москва: Русский путь, 2004, pp.193-196.

4

Н.П. Кондаков, "Древняя архитектура Грузии", *Древности. Труды Московского археологического общества*, 6(1876), pp.211-268.

5

Н.П. Кондаков, "История византийского искусства и иконографии по миниатюрам греческих рукописей", *Записки Имп. Новоросс. университета*, ч. 21, Одесса, 1877 [2nd ed.: Г. Р. Парпулов & А.Л. Саминский(eds), Пловдив, 2012]

6

Н.П. Кондаков, "Миниатюры греческой рукописи Псалтири IX века из собрания А.И. Хлудова", *Древности. Труды Московского археологического общества*, 7(1878), pp.162-183. この写本の以後の研究史は次の論文にまとめられている。高巖峻「《フルドフ詩篇》(モスクワ国立歴史博物館所蔵Cod.gr.129d)に関する諸問題」『新潟県立万代島美術館研究紀要』2(2007), pp.9-31.

7

Н.П. Кондаков, "Мозаики мечети Кахрие-Джамиси (Μουή της Χώρας) в Константинополе", *Записки Имп. Новороссийского университета*, Т.31, Одесса: Г. Ульриха, 1880. 単行本としても発行された。Н.П. Кондаков, *История византийского искусства и иконографии*. II. Мозаики, Одесса: Г. Ульриха, 1881.

8

Н.П. Кондаков, *Путешествие на Синай в 1881 г. Из путевых впечатлений. Древности Синайского монастыря*, Одесса, 1882.

9

Н.П. Кондаков, *Византийские церкви и памятники Константинополя*, Одесса, 1886.

10

Н.П. Кондаков & Д. Бакрадзе, *Опись памятников древности в некоторых храмах и монастырях Грузии*, Санкт-Петербург, 1890.

となる論文を3点投稿している。1867年には初の海外調査旅行でドイツ、チェコ、そしてスイスに赴き、この際プラハでは、チェコ民族運動を推進した歴史家のフランティšek・バラツキーと、政治家のフランティšek・ラディスラフ・リーゲルに会っている³。

1871年にはオデッサの新ロシア大学美術史学講座で教鞭をとるようになり、1873年には、古代ギリシャ美術に関する修士論文を提出することになる。古代がテーマというのは興味深いのが、クリミアで研究活動をしていたコンダコフにとっては、この地で発掘されている古代ギリシャ時代の美術が、ビザンティン美術の理解には大変重要なものであると考えていたゆえである。さらにその後はグルジアに赴いて中世グルジア建築を調査し、その成果をモスクワ歴史協会の機関紙に投稿している⁴。

1875年からは、博士論文の準備のために、2年にもおよぶ長期の調査旅行に出発することになる。今回の目的地はウィーン、パリ、ローマ、そしてシチリアで、主な目的は、これらの地の図書館等に保管されているビザンティン時代の彩飾写本を実地調査することであった。そしてこの成果は、博士論文『ビザンティン美術史—ギリシャ語彩飾写本を中心に』にまとめられた⁵。それまでの西欧の研究者は、彩飾写本をあくまでもマイナー・アートとカテゴライズしていたのに対し、この論文でコンダコフは、写本を美術史通史執筆のためのいわばメインに据え、図像・様式の両面からビザンティン美術史を構築することに成功している。考察の対象は、4世紀から15世紀までの広範囲にわたり、《ウィーン創世記》、《パリ詩篇》、《ヨシユア画卷》、《バシリオス2世のメノロゴオン》などの代表作を含め、194点もの写本を通史的に並べている。この中でコンダコフは、聖像論争前後に二つの黄金時代を設定し、「マケドニア・ルネサンス」という用語はさすがに使っていないものの、《パリ詩篇》を復古的な作品として10世紀に年代設定している。彩飾写本の重要性を十分認識していたコンダコフは、さらに1878年には、当時はまだ実業家アレクセイ・フルドフのコレクションであった《フルドフ詩篇》に関するモノグラフィーも執筆している⁶。

1880年から1886年のあいだにも、コンダコフは精力的にフィールドワークを行っている。まずは1880年、当時のコンスタンティノープルに赴き、カーリエ・ジャミーの調査研究を行う。それまでイタリア・トレチントの画家の手によるとされていたこの聖堂の壁画を正しくビザンティン美術史の中に位置づけたのは、他ならぬコンダコフであった⁷。翌1881年には、シナイ山聖エカテリニ修道院のモザイクと修道院書庫の写本の調査を行っている⁸。この調査報告には、シナイ山のイコンについては詳しくないが、これは1960年代にクルト・ヴァイツマンによる調査で補われることとなる。そしてさらに1884年には、かつてビザンティン聖堂だったコンスタンティノープルのモスクの調査を命じられ、この調査報告によってコンダコフは、ロシア帝室考古学協会から金メダルを授与されてもいる⁹。

このような研究業績が功を奏し、コンダコフは1888年、サンクト・ペテルブルク大学の美術史講座に招かれ、1892年には正教授の職位に就くこととなった。またそれと同時に、1888年から1893年までは、エルミタージュ美術館中世・ルネサンス部門の主任学芸員としても任命されていた。そして、このような公職のかたわら、コンダコフはフィールドワークに精を出し、グルジアや中東、バルカン半島での調査研究を続けていく。まずは1889年、コンダコフは再びグルジアに調査に行き、その成果を碑文学者のデメトリ・バクラゼと共に発表する¹⁰。この調査はゲラティやニコルツミンダ、シェモクメディなどのグルジア各地の修道院におよび、建築や壁画のみならず、イコンや工芸についても報告書の中で大きく扱っている。こうした研究成果は、シャルヴァ・アマラナ

シュヴァイラ次世代の研究者に継承されていくことになる。次に1891年からはシリア・パレスティナ地域での調査を行うが、この地での美術作品の調査は、少なくともロシアでは初めてのことであった¹¹。さらに1898年からは、ロシア科学アカデミーからの派遣で、スコピエやネレジ、オフリド、グラチャニツァ、ベチなどのバルカン半島の聖堂の調査を行い、その成果は1909年に大部の報告書として出版された¹²。

こうした海外での活動と同時に、コンダコフは中世ロシア美術の研究や紹介にも努めており、イワン・トルストイと共に著した6巻本の大著『芸術作品にみる中世ロシア』では、ウラジーミルやノヴゴロド、プスコフの美術作品等について言及している¹³。さらにコンダコフは、ロシア古美術の調査のみでは飽き足らず、ウラジーミル近郊の村のイコン工房で、みずからイコンの制作を行い、伝統技術の保護のため、展覧会活動を奨励している。また、20世紀に入ってからは、それまでのイコン研究の集大成である、『イエス・キリストの図像学』、『聖母マリアの図像学』をそれぞれ出版している¹⁴。

ロシア革命と亡命ロシア人

1917年のロシア10月革命によってロシア国内が内戦状態に陥ると、宗教人、知識人の中には海外への亡命を目論む者も増してくる。ここで革命勃発前後のコンダコフの活動を振り返ってみると次の通りである¹⁵。まず1917年4月、コンダコフはペトログラードからオデッサに移動、さらに同年9月にはロシア・イコンの資料収集のためにモスクワに赴いている。そして10月にはヤルタに戻り、刊行予定の大著『ロシア・イコン』の仕上げにかかっている。そして1918年9月にはオデッサに行き、翌1919年まで、かつて教鞭を取っていた新ロシア大学でロシア・イコンについての講義を行っている。しかしとうとう1920年2月には、コンダコフは黒海の対岸のコンスタンティノーブルに亡命することとなった。

第1次世界大戦でオスマン帝国が敗戦となると、コンスタンティノーブルはイギリスを中心とした連合国の支配下に置かれ、多くの亡命ロシア人がこの地を目指した¹⁶。黒海からの最初の大量脱出が始まったのは1919年4月のことであり、フランス軍の指揮のもと、15,000～20,000人の難民がオデッサからコンスタンティノーブルを目指したという。さらに1920年、白軍側の指揮官であったデニーキンやヴランゲリらの部隊が赤軍に敗北すると、15万人もの難民がロシアを離れることになり、彼らの大多数が目指したのがコンスタンティノーブルであったという。しかし大量の難民が一気に集まってきたコンスタンティノーブルの生活環境は劣悪であり、連合国軍は難民の受け入れをブルガリアやユーゴスラヴィアに打診し、両国は洪々この要請を受け入れている。

コンダコフもやはりコンスタンティノーブルでは長く生活はできないと考えたのか、あるいはすでに落ち着く先を確保していたのか、コンスタンティノーブル到着の数週間後にはすぐさまブルガリアに向かっている。1920年2月25日、コンダコフはブルガリアに到着、ソフィア大学で西洋中世美術の指導やブルガリア美術の研究を行い、さらにブルガリア科学アカデミーのメンバーに選出されている。そして2年後の1922年にはソフィアを離れ、当時のチェコスロヴァキアのプラハに向かうこととなり、最終的に1925年にプラハでその生涯を閉じることとなった。

ちなみに、コンダコフにペテルブルク大学およびオデッサの新ロシア大学で習っていたアンドレ・グラバルは、やはり1920年1月にブルガリアに亡命してソフィアの考古学

11
Н.П. Кондаков, *Археологическое путешествие по Сирии и Палестине*, Санкт-Петербург: Издание Императорской Академии наук, 1904.

12
Н.П. Кондаков, *Македония. Археологическое путешествие*, Санкт-Петербург: Издание Императорской Академии наук, 1909.

13
И. Толстой & Н.П. Кондаков, *Русские древности в памятниках искусства*, Т.1-6, Санкт-Петербург: Типография А. Бенке, 1889-1899.

14
Н.П. Кондаков, *Иконография Господа Бога и Спаса нашего Иисуса Христа*, Санкт-Петербург, 1905; *Idem*, *Иконография Богоматери*, Т.1-2, Петроград, 1914-15.

15
詳細な年表は次を参照。
И.Л. Кызласова(ed.), *Мир Кондакова: Публикации. Статьи. Каталог выставки*, Москва: Русский путь, 2004, pp.355-359.

16
以下の亡命ロシア人の動向については、次の論文を参考にした。
諫早勇一「同化と共生—中東欧諸国における亡命ロシア文化序説『言語文化』9-1(2006), pp.97-114. また、ロシアの「エミグレ」を総合的に扱った次の文献も参照。Elena Chinyayeva, *Russians outside Russia: The Émigré Community in Czechoslovakia 1918-1938*, München: R. Oldenbourg Verlag, 2001.

博物館で働いた後、1922年10月にはフランスのストラスブールに渡ってフランス国籍を取得し、ガブリエル・ミレのもとでビザンティン美術史の研究を続けていくことになる。

ところでこの1920年代は、日本でもビザンティン美術の紹介が盛んに行われた頃でもあった。雑誌『早稲田文学』を中心に美術批評を行っていた森口多里は、1924年からパリのソルボンヌに装飾美術を学ぶという目的で留学するが、そこで森口はガブリエル・ミレのゼミナールに出席し、「ミレ教授はソルボンヌの高等研究部でわずかの学生とテーブルを囲んでダフニのビザンティン芸術について講述していた。傍らには分厚い調査研究書が開かれていた」と観察している¹⁷。さらに森口は翌1925年、早稲田大学建築学科出身で、のちに早稲田で教鞭をとることになる建築家の木村幸一郎と共著で『ビザンチンの文化と建築』という書籍を洪洋社から出版する。伊藤忠太らが監修する建築叢書の1冊ではあるが、単行本として日本で出版されたビザンティン美術の書籍は、おそらくこれが初めてであろう。翌1926年には美術雑誌『アトリエ』の7月号に、^{さいしよとくじ}税所篤二による「ビザンスの美術」という文章が掲載され、9月号にも^{いちうじよしなが}一氏義良による「カリイザミのモザイクに就て」という文章が掲載されている。税所篤二は大正時代には有名だった美術評論家であるが、ワルワラ・ブプノワの妹・小野アンの夫である小野俊一の弟で、前衛アーティストのオノ・ヨーコの伯父にあたる人物という¹⁸。また、一氏義良は早稲田の英文を出ており、雑誌『中央美術』で活躍しながら、世界美術全集などの編集に携わっている。

いま名前を挙げたワルワラ・ブプノワ、そしてロシア未来派を紹介したブルリュークヤパリモフを最たる例として、1917年の革命のあおりでやってきた白系ロシア人は日本の同時代美術に大きな影響を与えたが、白系ロシア人には、ブプノワをはじめとして早稲田や東京外語でロシア語を教えていた人物も多く、こうしたことが当時の日本でビザンティン美術が受け入れられる背景になったものと思われる¹⁹。

プラハでのコンダコフの活動

さて、話をコンダコフに戻そう。コンダコフが最終的にプラハに行くことになるのは1922年のことであるが、実際には1921年の7月に、プラハ・カレル大学から招聘のオファーの手紙を受け取っている²⁰。コンダコフを呼んだのは、美術史家のカレル・ヒティル、民俗学者のイジー・ポリフカ、考古学者のルポール・ニーデルレらであったが、コンダコフのポリフカへの手紙によると、チェコスロヴァキアでの政権交代の影響が一方であり、その一方で、始めたばかりのソフィア大学での講義に一定の目処をつけたいというコンダコフの意向で、プラハに赴くのが1922年3月末になったという。

そしてプラハ・カレル大学でコンダコフの講義が始まるのは1922年5月からで、講義は当初の取り決め通りロシア語で行われ、また最初のうちは聴講生のほとんどがロシア人であった。チェコ人学生の申し出でフランス語で講義を行ったこともあったが、チェコ人の聴講生の数はあまり増えることなく、1923年の段階では、聴講生70人のうち、ロシア人学生は60人、チェコ人やその他外国人学生は10人程であったという。

確かに当時のコンダコフは、世界的なビザンティン美術史学の権威になっていたが、チェコの国立大学で、教員のみならず学生もほとんどロシア人という状況は、今日の感覚からはたいへん不思議ではある。しかし、ここには当時のチェコスロヴァキア政府の文化政策が大きく関わっていた。当時のチェコスロヴァキアでは、コンスタン

17

秋山真一『近代知識人の西洋と日本』東京：同成社、2007、pp.128-129。原典は『森口多里論集』（美術編）所収の「ギリシャ・ダフニ修道院モザイク画解説」。

18

小村大樹「歴史が眠る多磨霊園」（ウェブサイト、<http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/>、2013年1月4日閲覧）を参照。美術評論家としての税所篤二については次を参照。五十殿利治（編）『美術批評家著作選集 復刻 第9巻 税所篤二』東京：ゆまに書房、2011。

19

白系ロシア人の日本の文化や生活に与えた影響については次を参照。沢田和彦『白系ロシア人と日本文化』横浜：成文社、2007。

20

Л.Л. Копецкая, *op. cit.*

ティノーブルに集まっていたロシア難民を受け入れるにあたって、「ルスカ・アクツェ」すなわち「ロシア行為」あるいは「ロシア援助計画」とも訳される政策が取られたのである。初代大統領のトマーシュ・マサリクが提唱したこの計画は、ロシア難民のうち、研究者や学生、文化人が優先的に受け入れ、彼らにはチェコスロヴァキア政府から年金や奨学金を与えるというものであった²¹。プラハ・カレル大学の哲学教授もつとめたマサリクが研究者にシンパシーを感じたからというのもあろうが、新国家を作り上げたばかりのチェコスロヴァキアにとっては、たいへん思い切った計画であると思われる。実際この「ロシア行為」についてマサリクは、「みじめな亡命生活による幻想やモラルの低下を回避し、ロシアのインテリゲンツィア、なかでも若者たちに体系的な作業に慣れてもらうことが、主な目的である」と述べているが、ボリシェヴィキ政権に否定的であったマサリクは、やがてロシアに新しい民主的な国家が誕生し、彼らがロシアに帰った時には、彼らがチェコスロヴァキアの知識人とあいのパイプとなってくれるであろうとも考えていたようである。このためにチェコスロヴァキア外務省は年間1千万コルナもの予算を計上し、ロシア人向けの大学や研究機関が整備されていった結果、1920年代のプラハは「ロシアのオクスフォード」と呼ばれるほどになったという。

コンダコフはプラハにおいて、マサリク大統領との個人的な繋がりをも持つようになった²²。1923年末から1925年1月にかけて、コンダコフは大統領令嬢アリス・マサリクにプライベート・レッスンをを行っている。ロシア・アイコンや手芸に関心があったアリスに対し、コンダコフは建築史や装飾史の講義を行い、その講義には、大統領令嬢秘書のキラ・クリンデロワ、さらにはマサリク一家を以前から支援していたアメリカの富豪チャールズ・クレインの息子、ジョン・クレインも参加したという。チャールズ・クレインは、マサリクが客員教授としてシカゴに赴いた際に知己となってスラヴの民族主義に関心を持つようになり、アルフォンス・ミュシャの晩年の集大成である「スラヴ叙事詩」連作の制作にも資金援助をしているばかりか、現在はアメリカ大使館となっているプラハのシェーンブルン宮殿の一部を、住居としてコンダコフに提供している。また、コンダコフはしばしばプラハ近郊ラーニにある大統領の邸宅を訪問しており、コンダコフの日記によると、マサリク大統領とはボリシェヴィキについて、または作家のレフ・トルストイについて語り合ったという。

このように、プラハ・カレル大学からも温かく迎えられ、またチェコスロヴァキアの大統領一家や富豪のクレイン一家との親交もあったため、コンダコフは他の亡命ロシア人のような金銭的困窮とは無縁であった。実際、大学から毎月受け取る俸給は3300コルナと当時としては十分な金額であり、さらに著書『ロシア・アイコン』の原稿料の前払い金としてチェコスロヴァキア政府から3万コルナを受け取っており、その上大統領令嬢への講義やその他の謝金も入ってきたという。住居も、プラハに来てすぐはホテル暮らしであったが、先に述べたようにチャールズ・クレインが所有していた邸宅を無償で提供してくれている。

画家アルフォンス・ミュシャとコンダコフとの交流も興味深い²³。モラヴィア地方イヴァンチツェ出身のミュシャ（チェコ語読みでは「ムハ」）は、パリでポスター《ジスモンダ》のデザインの大成功で脚光を浴び、アール・ヌーヴォーの旗手として世界的に有名になったが、1910年にはチェコに戻り、1918年のチェコスロヴァキア独立の際は、新国家の貨幣や切手のデザインなども無報酬で引き受けている。民族意識が強かったミュシャは、すでにパリ時代からパリのチェコ人コミュニティである「ベセーダ」（図3）にも積極的に関与し、民族衣装は「国家の魂」とあるという信念のもと、モラヴィ

21

「ルスカ・アクツェ」の概説的な説明および出展は次を参照。諫早前掲論文：阿部賢一「「亡命」という選択肢—ニコライ・テルレツキーの『履歴書』をめぐって」『スラヴ研究』52(2005), pp.99-117. また、マサリクについては次を参照。林忠行『中欧の分裂と統一—マサリクとチェコスロヴァキア建国』東京：中央公論社, 1993.

22

Л.Л. Копецкая, *op. cit.*

23

ミュシャの作品には《ビザンティンの頭部》など、ビザンティン美術を意識した作品があるが、実際のビザンティン美術との関連性については次を参照。喜多崎親「ミュシャ《ジスモンダ》とビザンティン」『ユリイカ』570(2009), pp.152-163.

24
 ミュシャの民族意識や画業全体については、筆者も作品解説を手がけている次の展覧会図録を参照。千足伸之（監修）『ミュシャ財団秘蔵 ミュシャ展 パリの夢 モラヴィアの祈り』（exh. cat.）, 東京：日本テレビ放送網, 2013. 作品解説の執筆に際しては、ミュシャ財団の佐藤智子氏から様々なご教示をいただいた。

25
 Л.Л. Копецкая, *op. cit.*

26
Ibid.

27
 Лубор Ннедерле, *Быт и культура древних славян*, Прага: Пламя, 1924.

28
 Karel Chytil, Nikodim Pavlovič Kondakov, Antonín Friedl, *Kříž zvaný Závišův v pokladu kláštera ve Vyšším Brodě v Čechách* (Monografie archeologické komise při České akademii věd a umění, Sv. I.), Praha: Archeologická komise při České akademii věd a umění, 1930.

29
 Karel Chytil, N.P. Kondakov, Ellis H. Minns, Seminarium im. N.P. Kondakova, *The Byzantine enamels on the Záviš cross at Vyšší Brod*, Praha: Seminarium Kondakovianum, 1930.

30
 Ferdinand Josef Lehner, *Dějiny umění národa českého – díl I (Doba románská), svazek III (Architektura, sochařství, malířství, umělecký průmysl)*, Praha: Česká grafická akciová společnost Unie, 1907.

31
 Л.Л. Копецкая, *op. cit.*

32
 W. Eugene Kleinbauer, *op. cit.*

アの民族衣装のコレクションまでしていた。そして晩年を代表する「スラヴ叙事詩」連作の制作にあたっては、実際にモスクワやアトス山などに取材旅行に出かけている²⁴。また、制作にあたって何人もの歴史学者にアドヴァイスを求めており、コンダコフもまた、ミュシャにアドヴァイスを求められた一人であった。コンダコフの日記に



図4 アルフォンス・ミュシャ 《セルビア王ステファン・ドゥシヤンの東ローマ皇帝即位》 1926年 モラフスキー・クルムロフ城蔵 © Mucha Trust 2013

よると、「スラヴ叙事詩」のうち、ミュシャからは《セルビア王ステファン・ドゥシヤンの東ローマ皇帝即位》(図4)についての相談を受けており、またミュシャに招待され、ズビロフ城にしばらく滞在して「スラヴ叙事詩」を見学している²⁵。

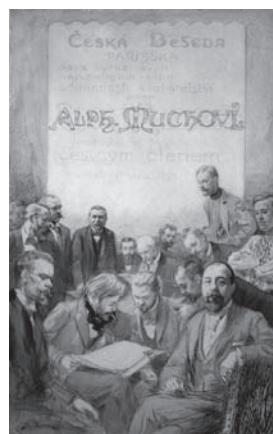


図3 フランティシェク・クプカ 《ベセダの任命書》 1898年 ミュシャ財団蔵 ©Mucha Trust 2013

プラハでの調査研究と「セミナリウム・コンダコウミアヌム」

プラハでの調査研究の様子もコンダコフ自身の日記に記されており、プラハ・カレル大学の同僚たちとの交流も知ることができる²⁶。考古学者のルポール・ニーデルレとは、チェコ語で書いたニーデルレの書籍『古代のスラヴ』のロシア語訳プロジェクトについて話し合っていた。結局これについてはロシア科学アカデミーが興味を示したため、最終的には部分訳としてコンダコフの息子のセルゲイ・コンダコフが実際の翻訳を手がけ、父のニコデーム・コンダコフはこのロシア語訳に序文を寄せることとなった²⁷。また、カレル・ヒティル教授とはチェコ南部にあるシトー会のヴィッシ・ブロート修道院の調査に共に出かけしており、その調査報告はコンダコフの没後に出版された²⁸。この調査の中でもコンダコフは、10～13世紀にビザンティンで制作されたとされる、いわゆる《ザヴィシュの十字架》(図5)に当然ながら注目している²⁹。また、コンダコフの遺品の中には、フェルディナンド・レフネルによる『チェコ美術史』³⁰の読書ノートがあるが、レフネルのこの著書もヒティル教授からの紹介であろうと考えられている³¹。

とはいえ、プラハ時代のコンダコフに託されていた最大の課題は、以前から取り組んでいた著書『ロシア・イコン』を完成させることであった。そもそもこの書籍は、1898年にロシアで最初の国立美術館として開館したアレクサンドル3世記念美術館(現：国立ロシア美術館)のイコンのコレクションを解説するために構想されたものであるが、結果的にキエフ・ルーシから16世紀モスクワ派までに至るロシア・イコンを体系的に美術史の中に位置づける、4巻にもおよぶ大著となった³²。ロシア10月革命直後にもコンダコフはこの書籍の執筆のために資料収集に奔走していたが、チェコスロヴァキア亡命後にもこの作業は持ち越され、チェコスロヴァキア政府の全面的なバックアップのもと、最終的に完成させることができたのであった。実際に出版されたのはコンダコフの没後



図5 《ザヴィシュの十字架》 10-13世紀 ヴィッシ・ブロート修道院蔵

のことである³³。

コンダコフがプラハで没するのは1925年2月のことであるが、4月には、かつてのロシア人の弟子たちが中心となり、師を顕彰する研究組織「セミナリウム・コンダコウミアム」が結成され、1941年までのほぼ毎年、同名の研究誌が刊行された。1931年にはコンダコフ記念考古学研究所と改名され、1953年に至るまでその活動は継続された。そしてその資料や蔵書は、今日ではチェコ科学アカデミー美術史研究所に継承されており、イコンのコレクションもプラハ国立美術館に寄託されている³⁴。

セミナリウム・コンダコウミアムの当初の代表は、歴史家のゲオルギー・ヴェルナツキーおよび考古学者のアレクサンドル・カリティンスキーが務めているが、ここで機関誌『セミナリウム・コンダコウミアム』の第1号の巻末に掲載された、この二人の代表による会の1926年度の活動報告を紹介しておきたい³⁵。この報告によると、この年には公開シンポジウムを2度開催しており、1回目はコンダコフの1周年にあたるタイミングで、プラハ・ロシア研究所との共催でプラハ・カレル大学哲学部の大講堂を会場にして開催している。ロシア研究所のフランツェフ教授のあいさつの後、「ニコデーム・コンダコフとコーカサス考古学」など3本の研究発表が行われた。また、2回目はコンダコフの誕生日に合わせたタイミングで、カレル大学哲学部小講堂を会場にして開催しており、カリティンスキーがコンダコフの思い出を語った後、ヴェルナツキーが「中世ペロポネソス半島の遺跡について」と題した研究発表を行っている。またこの年には、会員のためのセミナーが27回開催されており、ここには研究発表のための分科会と、書評のための分科会があった。また、報告書には、セミナリウム・コンダコウミアムに書籍を寄贈した著者のリストがあり、シャルル・デール、ジャン・エベルソル、ギョーム・ド・ジェルファニオン、ガブリエル・ミレ、ゲオルギオス・ソティリウーなどの名前も読める。そして書評の分科会でこれらを実際に読み、その評を機関誌『セミナリウム・コンダコウミアム』に掲載していた。

このようなプラハでのコンダコフの活動、そしてその弟子たちによる活動は、現在ではチェコのビザンツ学の歴史の中の偉大な第一歩として記録されている³⁶。

(新潟県立万代島美術館 主任学芸員)

※本稿執筆後の2013年2月17日、ミュシャ財団の佐藤智子氏から、プラハのミュシャ・アーカイヴの調査結果についてのご報告をいただいた。それによると、ミュシャの手書きのメモやノートにコンダコフの名前が登場するのみならず、「スラヴ叙事詩」の《聖アトス山》(1926年作)の習作の一枚に、コンダコフの名前が綴られているとのことであった。また、ミュシャの妻マルシュカの叔父でもあったカレル・ヒティルの祖先がブルガリアに居住していたという事実もご教示いただいた。コンダコフとミュシャとの関係については、稿を改めて深く考察したい。

33

Н.П. Кондаков, *Русская икона*, Т.1-4, Praha: Seminarium Kondakovianum, 1928-33 [2nd. ed.: Москва: Культурно-просветительный фонд имени народного артиста Сергея Стоярова, 2004].

34

セミナリウム・コンダコウミアムについては次を参照。V. Hrochova, "Les études byzantines en Tchécoslovaquie", *Balkan Studies*, 13 (1972), pp.301-311; Id., "Das Institut N.P. Kondakov und Ivan Dujčev", in: П. Диневков et al.(eds), *Исследования по славяно-византийскому и западноевропейскому средневековью: посвящается памяти Ивана Дуйчева* (Studia Slavico-Byzantina et Mediaevalia Europaensia, v. 1), София: Центр для славяно-византийских исследований имени Ивана Дуйчева / Госизд-во имени Д-ра Петра Берона, 1988, vol.1, pp.90-102; L.H. Rhineland, "Exiled Russian Scholars in Prague: The Kondakov Seminar and Institute", *Canadian Slavonic Papers*, 16 (1974), pp.331-351; В. Грохова, "Деятельность института им. Н.П. Кондакова в Праге и его международное значение (на основе сохранившейся корреспонденции)", in: И.Л.Кызласова(ed), *Мир Кондакова: Публикации. Статьи. Каталог выставки*, Москва: Русский путь, 2004, pp.219-223. また、イコンのコレクションの現状については、次のサイトから情報を得た。Jozef Matula, "Byzantine Studies in the Czech Republic and Slovakia: a Historical Review", The Society for the Promotion of Byzantine Studies(ウェブサイト, http://www.byzantium.ac.uk/frameset_spbnews.htm?czech, 2013年1月5日閲覧)。

35

Г.В. Вернадский & А.П. Калигинский, "Отчет о работах семинария имени Н.П. Кондакова (Seminarium Kondakovianum) за второй год его существования (по 17 Февраля 1927г.)", *Seminarium Kondakovianum*, 1(1927), pp.339-341. ヴェルナツキーやカリティンスキーをはじめ、メンバーのプロフィールについては次を参照。П.Н. Савицкий, "Справка об институте", in: И.Л. Кызласова (ed), *Мир Кондакова: Публикации. Статьи. Каталог выставки*, Москва: Русский путь, 2004, pp.211-218.

36

Jozef Matula, *op.cit.*